

○聖書箇所 マタイによる福音書 25章14-30節

「天の国はまた次のようにたとえられる。ある人が旅行に出かけるとき、僕たちを呼んで、自分の財産を預けた。それぞれの力に応じて、一人には五タラントン、一人には二タラントン、もう一人には一タラントンを預けて旅に出かけた。早速、五タラントン預かった者は出て行き、それで商売をして、ほかに五タラントンをもうけた。同じように、二タラントン預かった者も、ほかに二タラントンをもうけた。しかし、一タラントン預かった者は、出て行って穴を掘り、主人の金を隠しておいた。さて、かなり日がたってから、僕たちの主人が帰って来て、彼らと清算を始めた。まず、五タラントン預かった者が進み出て、ほかの五タラントンを差し出して言った。『御主人様、五タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに五タラントンもうけました』。主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。次に、二タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、二タラントンお預けになりましたが、御覧ください。ほかに二タラントンもうけました』。主人は言った。『忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。ところで、一タラントン預かった者も進み出て言った。『御主人様、あなたは蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集められる厳しい方だと知っていましたので、恐ろしくなり、出かけて行って、あなたのタラントンを地の中に隠して／おきました。御覧ください。これがあなたのお金です』。主人は答えた。『怠け者の悪い僕だ。わたしが蒔かない所から刈り取り、散らさない所からかき集めることを知っていたのか。それなら、わたしの金を銀行に入れておくべきであった。そうしておけば、帰って来たとき、利息付きで返してもらえたのに。さあ、そのタラントンをこの男から取り上げて、十タラントン持っている者に与えよ。だれでも持っている人は更に与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ぎしりするだろう』。

○説教「誰にでもタラントンはあるのだから」

みなさん、おはようございます。オンラインで礼拝されている方もおはようございます。皆さまの今週の歩みが主の恵みと守りの内に、良き日となりますようにお祈りしています。

本日の礼拝は、西南幼稚園創立71周年記念礼拝として守っています。さきほどは西南幼稚園年長ゆり組さんから暗唱聖句、また元気な讚美歌を披露していただきました。実は先週よりこの礼拝堂で子どもたちは練習を始めましたが、最初の練習の日からとっても元気いっぱい何物付け加えることがないような園児たちの姿に、わたしも幼稚園児の親として嬉しく思いました。日々ご指導くださる教員の皆さまに感謝する気持ちがいっぱいになりました。保護者の皆さまも恐らく心には感動一塩、という感じではないかと思いますが、まだ礼拝は続きます。今日の礼拝では、幼稚園の沿革に触れたい思いもやまやまなのですが、それは週報の最後ページに記しましたので、それをご覧いただくことにしまして、この説教においては私たち一人一人の命が神さまに創造された命であり、その他のなものと比べる必要もないそれぞれ異なる大切な命であることをお話しするために、イエス・キリストの「タラントン」の譬え話からお話をさせていただきたいと思います。教会員の皆さまは既に聞いたことのある話と思いますが、改めて心に受け止めていただければと思います。

今日のお話をもう一度簡単に振り返ってみましょう。ある家の主人が出かけることになりました。大変な資産家だったようで、家には三人の僕がいました。主人は留守の間、僕たちに財産を預けてい

ます。主人は僕たちを信頼していたので、財産を運用させようとしたのでしょう。ある人は5タラントン、ある人は2タラントン、ある人は1タラントン預けられました。どのように査定したのかはわかりませんが、主人は僕たちに任せる財産を均一にではなく、「それぞれの力に応じて」財産を任せられました。これが一つのポイントだと思いますが、はたして僕はこれをどう思ったのでしょうか。主人からしてみれば、これは彼らへのチャンスに他なりません。ところがこの僕たち3人の受け止め方は一緒ではありませんでした。5タラントン預けられた僕と2タラントン預けられた僕はそれぞれ預けられたものを用いて商売を始めました。しかし1タラントン預かった僕は、穴を掘って主人の金を隠しておいたのです。

かなりの日数が経ち、主人が帰ってきました。主人は僕たちを集め、預けたものがどうなっているかを確認しようとしてきました。5タラントン預けられた僕は他に5タラントン儲けました。2タラントン預けられた僕も他に2タラントン儲けました。主人はそれを見てこう言います。「忠実な良い僕だ。よくやった。お前は少しのものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」。

ところが、1タラントン預けられた僕は、隠しておいた1タラントンを差し出して言います。彼の言葉を要約すると、「失敗してお金を減らしてしまうのが怖くて、隠しておきました。どうぞ、預かっていたものをお返しします」。ということでした。それを見て、主人は言います。「怠け者の悪い僕だ。それなら、私の金を銀行に入れておくべきだった。そうしておけば、利息付きで返してもらえたのに」。そして最後に言います。「だれでも持っている人はさらに与えられて豊かになるが、持っていない人は持っているものまでも取り上げられる。この役に立たない僕を外の暗闇に追い出せ。そこで泣きわめいて歯ざしりするだろう」。

さて、みなさんはこの譬え話を聞いて何を感じられるでしょうか。普通の会社であれば与えられた課題に取り組まない人に懲罰や人事異動があることは考えられます。でも、問題はこれが天の国の譬えであるということです。天の国ってそんなに恐ろしいところなのかと思うのです。天の国とは神の思いを汲み、成功する人が入れる場所であり、そうでない人は追い出されてしまうのでしょうか。

そもそもキリスト教の福音とは、神は愛であり、すべての人のいのちが尊い、どんな人でも神に愛されているという Good News のはずです。ですからなんかうまく期待に込めてやらないと追い出されてしまう、地獄に落とされるみたいな話を聞くとぞっとするわけです。キリスト教の理想から考えれば、みんなが丸く収まる結末が良いと思います。例えば「主人は、1タラントンを差し出した僕を叱ったが赦し、みんなで慰労会を開いた」という結末ならいいと思うのです。ところが今日の箇所を見れば、そうはなっていません。天の国から追い出される人がいる。果たしてそれが神の愛なのでしょう。もしそうだとしたら、そんな国は、今私たちが生きている社会と何ら変わりはありません。成功する者はますます富み、貧しいものは更に貧しくなる。うまくやれる人はいいけれど、やれない人は結局のところ、見捨てられていく。世知辛い世の中と一緒にです。それが神の国なのでしょう。ですからなにかもやもやするのは、私たちがこの箇所をどのように読むべきなのでしょう。

聖書箇所を見て、ひっかかる問題箇所はいくつもあります。まず1タラントンの僕は何故、主人の期

待に応えようとしなかったのかということです。これには、彼の言葉から主人への不信感や恐怖が感じ取れます。この主人が本当に厳しかったのかどうかはわかりませんが、少なくとも彼自身はそう思っていたのです。もしかしたら彼は他の人と比べて1タラントンしか預けてもらえないという評価も厳しさとして受け止めていたのかもしれませんが。彼が傷ついていたことは十分に考えられます。もし私たちならどう思うでしょうか？主人に信頼して財産を預けられたことを喜ぶでしょうか。それとも、他の人との差に目を向けてしまうでしょうか？実に、私たちは恵みであっても人と比べてしまった時に苦痛に変わり、目を背けたくなる重荷になってしまうのです。だからこそ彼はそのタラントンを土の中にうめたのではないのでしょうか。でも、その気持ちはわかるように思います。そもそもこの主人は何故、このようなスタートの時点から区別をしたのでしょうか。どうしても他の人との差を感じます。劣等感が騒ぎ、気持ちよく働くことはできません。何故、主人は僕に対して平等に接しなかったのでしょうか？

実は、このお話しととても似ているお話しがルカによる福音書にあります。そこではタラントンではなく「ムナの譬え」となっていて、3人にそれぞれ区別してではなく、10人の僕に平等に1ムナというお金を渡して商売をさせるという話になっています。そしてある僕は5ムナもうけ、ある僕は1ムナを設けるというお話しになっています。そのため不公平感は解消されているのですが、でもよくよく考えるとスタートラインが一緒に儲けが異なるということは明確に努力や結果が問われているようで、それはそれできついことだと思います。

今日の聖書箇所では、そもそも主人が不平等なのだということに目を留めたいと思います。神が一人一人に違ったタラントンを与えられるということは、つまり量が多いか少ないかではなく、わたしたち一人一人に違いを与えられているというメッセージなのです。主人は僕たちにそれぞれの力に応じて、タラントンを与えられました。それについて不平不満を言ったところで始まりません。

しかしながら、わたしたちが心に留めたいことは、実に神は不平等ではあるけれど、公正な方であるということなのです。神は一人一人に漏れなく必要なタラントンを与えてくださっているからです。このタラントンという言葉は、実は英語のタレントという言葉の語源で、能力とか才能という意味があります。わたしたちが心に留めたいのは、任せられた財産の量ではありません。その人たちを見て、彼らに相応しいタレントを預けて行ったということなのです。ですから、言い換えれば大切なのは能力の数の差なのではなく、個性の違いなのです。

とはいっても、才能溢れる人になりたいと思います。能力だって少ないより多くあった方が良く決まっています。やっぱり神は不公平だと思います。私は実は双子として生まれたこともあり、子どもの時から人と自分を比べて生きてきました。そのため劣等感が強くひがみっぽいので、このように単純に考えてしまいがちです。しかしよくよく考えてみると、果たして数多くの能力があれば幸せにつながるのでしょうか。主人はこう言います。「少しのものに忠実であったから多くのものを管理させよう」。どういうことでしょうか。私はこう思うのです。数々の豊かな才能を与えられる人はいるかもしれませんが、羨ましくも思います。でも人によってはその才能をうまく生かすことができず、かえって器用貧乏で終わってしまったり、宝の持ち腐れになってしまったりするかもしれません。それよりはむしろ、たった一つの取り柄しかなかったとしても、その取り柄を極めて成功する人だっています。1タラントンの者が必ずしも5タラントンの者に劣るわけではないのです。

大切なことは、「少しのものに忠実であること」つまり自分に与えられたタレントにどう向き合っていくか。そしてそのタレントを与えられた神の思いをどのように心を留めて行くかということなのです。実に、私たちはたとえ必要な賜物が全て与えられていても、他の人と比べてしまった時、その賜物を十分に用いることはできなくなってしまうのです。現に2タラントンの者だって、5タラントンのものに比べたら半分以下です。1タラントンの者と同じような劣等感を感じていても不思議ではありません。でも彼は主人を恨むことなく、自分に与えられたものだけに目を留めていました。その時、周りのものはもう目には入らないのです。それが主人と僕との信頼関係なのです。そしてそれが失敗への恐怖を克服させることに繋がるのです。それはつまり、もし彼らが願っていたような成果を上げることができなくても、主人はしっかりそれを受け止めてくれるということを彼らは信じていたのです。

果たして主人は本当に儲けを期待していたのでしょうか。私はそうではないと思います。もし主人が、儲けを期待していたのであれば、その資産を減らしてしまう恐れのあることはしなかったのではないかと思うからです。むしろ1タラントンの僕が言うように銀行に預けていたのではないかと思います。主人の狙いはそこにあったわけではありません。むしろ僕たちにチャンスをおくれたのです。預けたタラントンをういて、僕たちに自由にやってみてほしかったのです。預けたタラントんで楽しんでほしかったのです。だから1タラントンの僕が、金を返しに来たときにはがっかりして、厳しい言葉になってしまったのではないかと思うのです。これはいわば期待の表れなのではないかと思うのです。

ですから主人の言葉を、私の言葉で言いかえるならばこうなります。「あんた、なんばしととね。そげんこと言っとらんばい。きさん、おれが金の損得なんば気にしちよるば思っとったとや？俺がそげんしょばい奴に見えるとや？俺が財産ば預けちよる意味ば分からんやったとや？俺はお前に財産ば好きにしてほしただけやったとに。頑張っちよるやつに俺が怒るわけなからうが！」

この1タラントンとは決して小さいお金ではありません。これは、当時の労働者の一日分の賃金の6000倍だと言われます。つまり単純計算で、一日分の労働賃金が一万円だとしたら、6000万円ということになります。つまり、この主人が任せた賜物は1タラントンだからと言って小さいものではない。私たちにとって十分なものである。私たちのタレント、言いかえれば私たちのいのちには、むしろ無限の可能性があるということを教えようとしているのではないのでしょうか。大切なことは、この主人は僕たちの自由で生き生きとした人生を望んでいたということなのです。そして、それが神の願いであり、神の国であるということを伝えようとしているのです。

実は私たちは自分に与えられているタラントんに目を留めることよりも、他の人のタラントンをうらやむように作られているのではないかと思うほど、自分に与えられているタラントんに目を留めるということが苦手です。わたしは実は、自分の取柄というよくわかりませんでした。色がない、だからストロングポイントを作ったらよいと言われ、取り組もうとしたことがあります。しかし、そんな時に友人が「色がないという色もあるんじゃないですか？それってとても大切で良いポイントだと言われ、心がすっとしたことを覚えています。自分に与えられた恵みと向かい合い、そこに生きた時、驚くべき祝福があることを覚えたいのです。2タラントンの者も5タラントンの者もそこで、倍の報酬を得ています。これは、私たちの賜物を通して恵みが豊かになっていくということを私たちに教えています。誰にでもタラントンは与えられているのです。そして神は私たちがそのタラントンをういて、私たちが楽しく生きていくことを願っておられるのです。その恵みを分かち合って共に生きて行くのが教会なのです。今日は、子どもたちのことですが、わたしたち一人一人に神さまが大切な賜物、個性を与えられているということをお話ししました。皆さんの上に、神の祝福をお祈りいたします。